

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(宇都宮大学・教育学部)

活動名	芳賀町教育委員会小中学校連携推進会議
対象者	推進校校長，教務主任，学習指導主任，児童指導主任，生徒指導主事，擁護教諭，こども育成課事務局
実施期間	平成25年2月14日
活動場所	芳賀町町民会館 2階研修室
教員名（専門分野） 関係者等	澤田匡人（教育心理学・感情心理学） 芳賀町教育委員会
参加者数	21名
活動の目的	芳賀町では小中連携推進会議を立ち上げ、小学校から中学校への連携に努め、教員の資質向上のための研修会を行った。その講話としていじめに関する最新の研究成果を紹介した。
成果	「いじめを取り巻く省中学生の類型化の試み」と題した講話で、いじめを理解する上で、いじめに直接的には関与しない児童・生徒の感情に注目する重要性を指摘し、芳賀町におけるいじめ対応の一助を期した。
<p>【活動内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆開会 ◆推進校校長挨拶 ◆研修 {いじめを取り巻く小中学生の類型化の試み} 講演者氏名：澤田匡人 ◆協議事項 <ul style="list-style-type: none"> ・平成24年度の事業報告 ・平成25年度の事業計画 ・小学校からの情報提供 ◆閉会 	

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(埼玉大学・教育学部)

活動名	茨城県民大学講座 「子どものこころの支え方」
対象者	一般市民・保護者
実施期間	平成 24 年 10 月 11 日～平成 25 年 3 月 7 日 全 5 回
活動場所	茨城県古河市三和図書館
教員名（専門分野） 関係者等	堀田 香織（臨床心理学）
参加者数	30 名
活動の目的	育児ノイローゼや虐待、いじめや不登校など、子どもをめぐる様々な問題が起きています。子どもを健やかに育てるために、家庭・地域で何ができるか、幼児期から思春期の子どもの養育について考えること目的に企画しました。
成果	現在、子どもを養育し、いじめ問題に直面する保護者、母親を支援しようとする地域のサポーター、孫を養育しその親を支える祖母世代、など、多様な立場の市民が、子どものいじめをめぐる理解を深め、支えあっていく意識を促進することができた。
<p>【活動内容】</p> <p>講演</p> <p>第 1 回 子育てのストレスと子育て支援 育児ノイローゼ・虐待を防ぐために</p> <p>第 2 回 <u>学校との連携</u> <u>わが子がいじめにあったら？学校に行かなくなったら？</u></p> <p>第 3 回 子どもの心の傷つきとケア 両親が離婚した時、災害にあった時</p> <p>第 4 回 思春期の子どもとのつきあい方 第 2 次反抗期をめぐって</p> <p>第 5 回 子どもの心理臨床 子どもの異常行動と心理療法</p>	

【活動内容】

第2回 学校との連携「わが子がいじめにあったら？」

1 いじめ被害者の心理

「いじめられていることを認めたくない」「知られたくない」「自分が悪いからいじめられる」「すみません」「もういじめからは逃れられない」「復讐したい」PTSD・長期的悪影響

2 我が子がいじめにあったら

(1) 小学校低～中学年の場合

*まずは、子どもの話を聴こう。＜傾聴＞ *子どもの気持ちを受け止める。＜受容＞

*わが子にとっての「事実」を整理しよう。

*子どもの対応や勇気を誉めよう。「よくお母さんに話してくれたね」

*必要があれば、もし同じようなことがあったら、どのようにふるまえばよいか話し合う。

*担任の先生に早めに連絡する。

(2) 小学校中～高学年、中学校の場合

*本人が語ってくれる場合・・・＜傾聴＞＜受容＞＜対処方法＞＜学校との連携＞
学年主任、部活顧問、管理職、養護教諭、スクールカウンセラー

*本人が語ってくれない場合・・・

 家族は、子どものいじめ被害に気付けるか？

 自分が大切にされていることが実感できる「居場所」づくり

*長期的影響への持続的対応

＜注意＞

*子ども以上に傷つく、子どもの前で感情的になる、加害者を責める、担任を責める。

*子どもを責める。「あなたが嫌って言わないから」「あなたが弱いから」

*わが子の語る「事実」が客観的な「事実」と信じ込む。

*わが子だけを正当化する。

*相手の保護者に苦情を言う。保護者同士で解決しようとする。

*他の多数の保護者に情報を流す。インターネットで正当性を主張する。

3 加害者の心理

「欲求不満状態（気晴らし・鬱憤晴らし）」「満たされない権力欲」「自尊心の低下と、傷つきやすい自己愛」「見捨てられ感」ピアプレッシャー 集団心理

4 我が子が加害者になったら

*事実確認と、本人の言い分の確認

*もし自分が相手の立場だったら、どんな気持ちになるか、話し合う。

*親が人間として大切にしていることを伝える

*子どもに何らかのストレスがかかりすぎているのではないか、生活を見直す。

*子どもが十分に愛されていると感じられているか、見直す。

*両親・家族全体が仲良く、家庭が「居場所」になっているか見直す。

*被害者への謝罪 *学校との連携

＜注意＞

*それくらいのことは子ども同士でよくあることだと、開き直らない。

*本人がどうしても認めようとしない場合、親として悲観しすぎない。追い詰めすぎない。

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(東京学芸大学・教育学部)

活動名	①Bullying in Japanese Schools ②Bullying and School Absenteeism in Japanese Schools ②Global Bully Watch
対象者	①国際シンポジウム”Cross Cultural Perspectives on Youths and Violence” University of Wisconsin 主催の参加研究者等 ②カナダのブリティッシュ・コロンビア大学アジア研究所主催、日本研究所開設 10 周年記念国際シンポジウムの参加研究者、政治家、行政職 ③タイ国のマヒドン大学子ども家族発達研究所主催教育関係者
実施期間	①1995 年 7 月 ②2000 年 10 月 ③2005 年 9 月
活動場所	①ウイスコンシン大学ミルウォーキー校 ②カナダのブリティッシュ・コロンビア大学アジア研究所 ③タイのマヒドン大学子ども家族発達研究所
教員名（専門分野） 関係者等	杉森伸吉（集団心理学・社会心理学）
参加者数	①50 名 ②100 名 ③110 名
活動の目的	①～③ 日本におけるいじめの理解
成果	各国のいじめ関係者などと、有意義な意見交換などを行うことができた。

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(東京学芸大学・教育学部)

活動名	教育実践報告会「子どもとつながること」
対象者	現職教職員・学生
実施期間	2012.12.15
活動場所	曳舟文化会館
教員名（専門分野） 関係者等	大森 直樹（教育実践）
参加者数	34名
活動の目的	いじめや不登校の子どもとの関わりを重ねてきた教育実践の報告を得て、教職員が子どもとつながることについて認識を深める。
成果	参加者が子どもとつながることについて、事実にもとづき認識を深めることができた。
<p>【活動内容】</p> <p>1. 開催主旨</p> <p>2. 教育実践報告①</p> <p>3. 教育実践報告②</p> <p>4. 質疑応答</p> <p>5. 閉会</p>	

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(横浜国立大学・教育人間科学部)

活動名	子どもの社会的スキル横浜プログラムとYPアセスメントの活用講習
対象者	小学校・中学校教員
実施期間	平成19年から校内研修や行政研修で不定期に実施
活動場所	依頼のあった学校や教育委員会の研修会場
教員名(専門分野) 関係者等	犬塚 文雄(生徒指導)
参加者数	20~200名
活動の目的	いじめの予防プログラムとして、また、いじめの早期発見ツールとして上記プログラムとアセスメントを小中の学校現場で組織的に有効活用してもらうことを目的としている。
成果	プログラム導入により、学級が重苦しい防衛的風土からサポートティブな支持的風土に変容してきているとの報告を受けている。
<p>【活動内容】</p> <p>活用講習会の前半は、基礎編でいじめの予防プログラムとしての「子どもの社会的スキル横浜プログラム」と、早期発見ツールとしての「YPアセスメント」のそれぞれの特長と限界性について話題提供を行う。後半は実際編で、プログラムとツールの活用法についての演習を行っている。</p>	

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(山梨大学・教育人間科学部)

活動名	青少年健全育成 大月大会
対象者	小学校・中学校・高等学校教育、保護者、教育関係者
実施期間	平成 24 年 11 月 17 日
活動場所	大月市民会館
教員名（専門分野） 関係者等	岡林 春雄（教育心理学） 大月市教育委員会
参加者数	50 名
活動の目的	「地域で子どもを守り育てる」という観点から、社会や地域では何ができるのか考える。
成果	記念講演なので、本当の成果は上記対象者が、それぞれの場に持ち帰り、どのように行動するかにかかっている。少なくとも、いじめ等の子どもの問題に、地域の大人が関わらなければならないこと、ならびに、大人の意識改革が必要なことは理解してもらえたと思われる。
<p>【活動内容】</p> <p>* 記念講演「地域で子どもを守り育てる」 講演者： 岡林 春雄（山梨大学）</p> <p>* 質疑応答</p>	

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(山梨大学・教育人間科学部)

活動名	甲府教育推進5者会議：平成24年度甲府の教育を考える検討会
対象者	甲府の校長会、教頭会、教育会、PTA、市教育委員会
実施期間	平成24年11月12日
活動場所	甲府市教育研修所
教員名（専門分野） 関係者等	酒井 厚 （発達心理学） 臨床心理士：中村 真理子 法務技官：長谷川 准
参加者数	100名程度
活動の目的	甲府の校長会、教頭会、教育会、PTA、市教育委員会の5団体による甲府市の教育の充実・発展のため
成果	いじめ加害に関わる要因について、発達心理学および発達精神病理学の観点から解説し、他の2人の登壇者とともに参加者からの質問に答えた。
<p>【活動内容】</p> <p>毎年、甲府教育推進5者会議では、甲府市の教育を充実・発展させることを目的に、時事的なテーマを基に有識者を呼び、講演やシンポジウムを開催している。今回は、最近のメディア報道によって改めて注目された「いじめ」をテーマとしてシンポジウムが開催され、有識者の立場から発表と質疑応答を行った。</p>	

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(山梨大学・教育人間科学部)

活動名	子どもと親と教師のための教育相談
対象者	山梨県内外の児童生徒・保護者・教師
実施期間	平成 20 年 4 月～現在
活動場所	山梨大学教育人間科学部教育相談室
教員名（専門分野） 関係者等	谷口 明子（教育心理学） 鳥海 順子（特別支援教育） 非常勤相談員：鶴田理恵
参加者数	平成 23 年度相談件数述べ 1123 件
活動の目的	山梨県内外の児童生徒・保護者・教師が抱える学校生活に関する問題（いじめを含む）について教育相談を行い，問題解決を援助する。
成果	平成 19 年度の開始以来，相談件数は増加を続け，不登校・いじめが一定の解決に至った事例もある。地域のニーズに見合うサービスを提供できていると考えられる。
<p>【活動内容】</p> <p>電話・メール・面接を方法とした教育相談を行う。「いじめ」のみを主訴とする教育相談は少ないが，発達障害や不登校の相談のなかで「いじめ」の話が出ることは多く，対応について保護者や教師に助言を行なっている。</p>	